



Title	日英西語の数量詞遊離現象
Author(s)	山下, 好孝
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 3, 152-160
Issue Date	1999-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/45582">http://hdl.handle.net/2115/45582</a>
Type	bulletin (article)
File Information	BISC003_010.pdf



[Instructions for use](#)

## 日英西語の数量詞遊離現象

山下好孝

Japanese quantifiers can separate from their original position in a noun phrase and be located in front of a main verb. This phenomenon is very common in Japanese as is seen in (1)

(1) *Watashi-wa hon-wo 3-satsu kaimasita.*

It is seen also in English and Spanish but with many constraints. In this brief article I examine this phenomenon contrastively among these three languages. The article is based on some published studies, and I owe much of the data to Mihara (1998d) and Furukawa (1999).

I show how the phenomenon differs from one language to another and emphasize the importance of further theoretical analysis based on accurate linguistic description.

### 1. 初めに

日本語教育の初級文法で名詞句と連関する数量詞を動詞の直前に置く

(1) 私は本を 3冊／全部 買いました。

というような文型が導入される。しかしこの文型は多くの日本語学習者には定着せず

(2) 私は 3冊／全部の本を 買いました。

(3) 彼は 本3冊／全部を 買いました。

というような文を彼らは作ってしまう。直接目的語の「本を」と「3冊」が遊離していることが多くの言語では珍しい現象であるためかもしれない。これらは非文ではないのだが、日常会話の日本語としてはどことなく不自然であると私には感じられる。そこで、この遊離現象について、英語、スペイン語、日本語を対照して各言語でどのような特性があるのか見てみた。これらの記述的なデータをもとに、将来、理論的な考察が必要となることは言うまでもない。なお議論、データの多くは三原 (1988d)、古川 (1999) に負っている。

## 2. 英語の数量詞遊離

英語では遊離する数量詞の種類がわずかなものに限られる。

- (4) a. The students (all/both/each) attended the class  
b. \*The students (many/some/every/three) attended the class

学生はみんな／どちらも／それぞれ授業に出席した。

学生は沢山／何人か／みんな／三人授業に出席した。

対訳に見られるように英語では遊離が許されない数量詞でも日本語では遊離がみとめられる。井上 (1978) によると遊離を許すのは、all, each, both に限るようである。

遊離可能な範疇としては、英語では主語、直接目的語、間接目的語に限られる。

- (5) a. The men all left  
b. The guides each took a separate path  
c. The children both got dirty  
(6) a. Hang your coats all up on hangers.  
b. Cinderella's fairy godmother turned the punpkins all into handsome coaches  
(7) a. I gave the kids all some candy to keep them quiet.  
b. Dad bought the twins both bicycles for Christmas.

ただし、間接目的語を前置詞 (to, for 等) + 名詞で表す構文では、数量詞遊離が不可能となる。

- (8) a. \*I gave some candy to the kids all to keep them quiet.  
b. \*Dad bought a bicycle for the twins both for Christmas.

数量詞が文末に来る時、前接する要素が名詞句の場合は非文となる。その場合でも代名詞では言えるが、数量詞は all/both に限られる。

- (9) a. \*Mary hates the marines both.  
b. \*Joe was arrested by the cops all.  
c. I called them {all/both/\*each}.

また、この場合音声的な強勢は、代名詞にではなく、数量詞に落ちる。

- (10) a. I like them ALL.  
b. \*I like THEM all.

次に名詞句と数量詞が文の中で一つの構成素をなすのかどうか見てみる。主語として機能する代名詞+数量詞の後には、挿入句を入れることが

出来る。しかし、名詞句＋数量詞では出来ない。

(11) a. They all, it seems to me, have the same outlook on politics

b. \*Your bothers all, it seems to me, have the same outlook on politics  
名詞句の場合は挿入句の後ろに数量詞を置く必要がある。

(12) a. The men, I think, both left at dawn.

b. \*The men both, I think, left at dawn.

このことは、代名詞＋数量詞が文の一つの構成素をなしているのに対し、  
名詞句＋数量詞の場合は別々の構成素をなしていることを意味する。

また、遊離数量詞が文末に来てはいけないという現象がある。数量詞の  
後ろに何らかの構成要素が必要とされるのである。

(13) a. \*I found John and Mary and Sue all.

b. I found John and Mary and Sue all sitting on a park bench.

ただし遊離数量詞に後続する要素は何でもよいわけではない。

(14) a. \*Aunt Mary made the boys all a good mother.

b. \*Frank promised the men all to leave.

(15) a. \*I saw the men all yesterday.

b. \*He argued with the men all about politics.

遊離数量詞に後続する要素は、数量詞との間で一種の叙述関係を構成し得  
るものでなければならないのである。

次に、数量詞の先行詞となる名詞句についてみてみよう。

(16) a. \*Children all enjoyed the movie.

b. The children all enjoyed the movie.

(17) a. \*Students will each make a speech.

b. My students will each make a speech.

上の例から分かるように、先行詞となる名詞にはそれを特定化する決定  
詞 (determiner) が必要である。ただし、総称名詞句である場合は、指示  
対象の特定化が常になされるため、裸の名詞句でも数量詞遊離が可能とな  
る。

(18) a. Americans are all great admirers of John F. Kennedy.

b. Languages are all used as a means of communication.

決定詞のない名詞句でも、非制限的關係節などで先行詞を特定解釈する  
と数量詞遊離が可能となる。

(19) a. \*Five contestants will all perform again tomorrow.

- b. Five contestants, who were selected as finalistas by the judge yesterday, will all perform again tomorrow.

### 3. スペイン語の数量詞遊離

スペイン語では数詞以外に数量詞として ambos (両方), cada (それぞれ), cualquier (なんでも), sendos (それぞれ一つずつ), todo (すべての) がある。古川 (1999) によると、このうち単独で後方への遊離を許すものは ambos と todo だけである。また、遊離を許す範疇は主語に限られる。

- (20) Los alumnos vinieron todos. (生徒達はみんなやって来た。)  
(21) Para muchos los templos sagrados, la majestuosa belleza del monte Fujiyama y la agitación urbana de Tokio todas forman parte de las experiencias inolvidables de un viaje a Japón.

(多くの(日本を訪れる)人たちにとって、神聖な神社仏閣、荘厳な富士山の美、東京の喧噪、これらすべてが日本旅行の忘れられない経験となる。CNN ニュース1999年10月6日 <http://cnnenespanol.com>)

一見すると目的語の数量詞遊離構文に見えるものもあるが、実はそうではない。

- (22) Los libros de Neruda, los tengo todos.

(ネルーダの本は、僕は全部持っている。)

これは、直接目的語が前置され、それが弱勢形対格代名詞 los で重複された「左方転移文」である。したがって、次の文(23)の構成要素 todos los libros de Neruda から数量詞 todos が遊離したとは見なさない。

- (23) Tengo todos los libros de Neruda.

以下では、考察を主語名詞句から遊離した todo (s)に限る。

- (24 a. Todos los alumnos vinieron. (生徒達はみんなやって来た。)

b. Los alumnos todos vinieron.

c. Los alumnos vinieron todos.

(24 b) のように、遊離数量詞が名詞句に直接後続する場合には、名詞句と数量詞の間に音声的なポーズが必要となる。これは英語と同じく名詞句 + 数量詞が一つの構成素とならず、別々の構成素をなしていることの現れである。

- (25 a. Los aficionados del Betis, todos eran sevillanos.

(サッカーチームベティスのファンはみんなセビリア人だった。)

b. ? Los aficionados del Betis todos eran sevillanos.

では、代名詞ではどうだろうか。

(26) a. Todas ellas vinieron. (彼女たちはみんな来た。)

b. ?? Ellas todas vinieron.

c. \* Ellas vinieron todas

d. Vinieron todas ellas

e. \* Vinieron ellas todas.

以上のことから代名詞の場合、数量詞+代名詞が英語と同じように文の構成素をなしており、それを分割分離することが出来ないことをが分かる。

では、(24 a) と (24 b, c) の意味上の違いはあるのだろうか。この点に関して、古川 (1999) が挙げた次の例文を見てみる。

(27) a. Todos, Juan, Paco y María vinieron a la fiesta.

(ファンも、パコも、マリアもみんなパーティーに来た。)

b. Juan, Paco y María todos vinieron a la fiesta

古川氏によると、(27 a) には一緒に来たという集合的な意味があり、(27 b) にはバラバラに出て来たという離散的な意味があると言う。これは加藤 (1997) が日本語に関して主張していることと軌を一にする。たとえば、八百屋に行って山積みになっているリングを見て、

(28) \* 5 個のリングを下さい。

とは言えず、

(29) 5 個のリングを下さい。

と言わなければならない。つまり、買うリングはどれでもいいわけだから集合的認知をして「5 個のリング」と言うと、非適切な発話になるというのである。

この主張が

(30) a. Todos los alumnos vinieron a la fiesta.

(生徒達はみんなパーティーに来た。)

b. Los alumnos, todos vinieron a la fiesta.

という場合に当てはまるのかどうか、スペイン語母語話者の何人かに尋ねてみたのだが、そのような違いがあるかどうかははっきりしないという答えであった。(27 a, b) の文も自然ではないという反応があった。文法性の曖昧な文を基にしての議論には疑問が残る。



同盟国 3 カ国に

5. (出発点) 1 本のフィルムから 12 枚 撮れます。  
フィルム 1 本から
6. (場所) 115 校の全国の大学で 紛争が起こった。  
全国の大学 115 校で
7. (移動の場所) 500 キロの東海道を 1 スポーツカーで走った。  
東海道 500 キロを
8. (期間) 2 ヶ月の夏休みの間 山中湖で 暮らした。  
夏休みの間 2 ヶ月
9. (比較) 10 人の親類より 1 人の親友の方が ありがたい。  
親類 10 人より 親友 1 人の方が

といった様々な助詞と結びつくことが可能である。一方、(c)のパターンでは主語になるか直接目的語になるかだけで、その他の格助詞とは結びつかないとされている。

(35) \*農協職員達はバスで箱根に 3 台向かった。

(36) \*田中先生は今、留学生に日本語を 3 人教えている。

ただし、「～に会う」「～にあたる」のような「ニ」格、場所を表す「～を渡る」のような「ヲ」格、着点を表す「～に行く」の「ニ」格などは数量詞遊離を許す。

(37) 私は団体客を泊める宿屋に 2、3 軒あたってみた。

(38) 私は橋を 2 つか 3 つ渡ったと記憶している。

(39) 僕はあれから美術館に 2 つ行ったよ。

英語とは異なり、日本語では名詞句+数量詞が一つの文の構成素となっているようである。

(40) a. 通行人が 3 人ヤクザに殴られた。

b. ヤクザに殴られたのは通行人が 3 人です。

「通行人が 3 人」の部分の分裂文の焦点の位置に来ることが出来るからである。

では次に、遊離数量詞が主語である場合を検討する。

(41) 学生が研究室に 3 人来た。

(42) \*友達が新宿で田中先生に 2 人会った。

これらの文の容認度の違いは、かつては構文的なものであるとされていたが、現在では意味的なものであると考えられている。つまり先行詞とな



る名詞句がその文の提示句となっていなければならないという制約である。

(41') 学生に関しては、研究室に3人来た。

(42') ??友達に関しては、新宿で田中先生に2人会った。

というようなパラフレーズをした場合、(41')の提示句「学生」は、意味のある述語と結びついており、発話されるだけの価値があると思われる。

(42')の「友達」では、これだけでは情報が不足しており、談話の提示句としては解釈しにくい。

もう一つの例を見る。

(43 a) \*学生が図書館で30人勉強した。

b. 学生が図書館で30人勉強している。

(43 b)のように、今図書館で勉強している学生の数について言及することは、発話するだけの価値のあるものであろう。しかし、(43 a)のように、過去のある時、図書館で勉強した学生の数を言うことは、それだけでは何の意味も見いだせない。

最後に、遊離数量詞が目的語である場合を見ておく。

三原 (1999 a - d) で主張されているように、遊離数量詞が目的語の場合は、意味的アスペクトの制約がある。

(44 a) 子供がおもちゃをもう2つ壊した。

b. 僕は書類を午前中に3つ仕上げた。

c. 操作課は刑事を現場に2人派遣した。

(45 a) \*僕は同僚を本気で2人疑った。

b. \*菜穂子は親友をそれでも2人信じた。

c. \*彼は自分を追いつめた男を心から2人憎んだ。

(44)では、いずれも動作に必ず終わりがある動詞で完了的 (telic) と呼ばれるものが述語動詞に來ている。それに対し、(45)では、外的な要因などで動作が妨げられない限り何時までも動作が続行し得る未完了的 (atelic) な動詞が述語動詞として使われている。日本語で遊離数量詞が目的語の場合には、完了的なアスペクトを持った述語と共起しなければならないという制約が適用される。

## 5. 最後に

以上、三つの言語で数量詞遊離と呼ばれる現象に関して、先行研究の成

果を中心に見てきた。一口に数量詞遊離と称する現象でも言語間でかなりの相違があるようである。複数言語で類似した現象が観察されたとしても、無理矢理一つの理論で説明しようとすることは適当ではない。それよりも少し個別の言語の特性を言語事実として明らかにする方が実りの多い結果になると思われる。

さらに、最初に触れたように、日本語で

(46) 本5冊を買った

というパターンは、初級での日本語教育の場には通常現れないが、テレビのニュースなどではよく耳にする。このパターンを使う要因はいったい何であろうか。これも今後の課題の一つとしたい。

#### 参考文献：

- 井上和子 (1978) 『日英対照日本語の文法規則』、大修館書店  
奥津敬一郎 (1969) 「数量詞表現の文法」、『日本語教育』14号、日本語教育学会、p42-60  
加藤重弘 (1997) 「日本語数量詞に見る認知とテキスト戦略、『月刊言語』 Vol 26, No.10, 大修館書店 p90-95  
神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタックス、『月刊言語』 Vol 6, No. 9 大修館書店 p.83-91  
古川亜矢 (1999) 「スペイン語普遍数量詞の連体用法と遊離用法、日本イスペインヤ学会口頭発表 (京都外国語大学)  
三原健一 (1998 a) 「数量詞連結構文と「結果」の含意 (上) 『月刊言語』 Vol27, No. 6 大修館書店 p.87-95  
三原健一 (1998 b) 「数量詞連結構文と「結果」の含意 (中) 『月刊言語』 Vol27, No. 7 大修館書店 p.94-102  
三原健一 (1998 c) 「数量詞連結構文と「結果」の含意 (下) 『月刊言語』 Vol27, No. 8 大修館書店 p.104-112  
三原健一 (1998 d) 『生成文法と比較統語論』 くろしお出版